

図書館という「場」が持つ意味：学生時代そのもの

田 口 聡 志

私にとって図書館といえば、「学生時代そのもの」といってもよいぐらい、多くの思い出が詰まった存在である。

もう何十年か前の春、私は田舎の高校を卒業後、一年浪人した末に大学に入学した。色々な夢を描き、明るい希望を持って上京し大学に入学したのであるが、いざ入ってみると「大学って、意外につまらないんだな・・・」と感じることが多く、大学からどんどん足が遠のいてしまっていた。周りのキラキラ輝いた「ザ・大学生」達にも溶け込めず、悶々とする日々。当然成績も芳しくなかった。「このままここにいるべきなのだろうか？大学やめようかな・・・」などと悩んだこともあった。

しかし人生の転機は、大学生活の折り返し地点に訪れた。それは大学3年生の春。あまりやる気がなかったのに、たまたま選んだゼミが大当たりで、生活が一変。大学中心、そして図書館中心の毎日になった。「来週までに」と先生に出された膨大な量の課題をゼミの仲間たちと一緒にこなす。朝からみんなで図書館に籠もり、分担して雑誌や本を調べた。たくさん本を読んで、たくさんコピーをして、たくさん議論をした。そして夜になって図書館が閉館した後は、近所のファミレスに移動して、晩御飯を食べつつ議論の続きをした。そしてファミレスが閉店になると、ゼミ生の下宿に移動し、夜食を食べつつさらに議論の続きをした。楽しかった。そして皆で雑魚寝。大学に入ってよかったと、はじめて心から思った。

現在、世間では、新しいテクノロジーの進展によって、人間の業務の多くがAIに代替されるということが言われている。また、最近では、本や論文記事が電子化され、webで簡単に検索し読めるようになった。本当に便利な世の中になったが、そんな中で、もしかしたら司書の業務のあり方、ひいては図書館のあり方というものも、今後大きく変わっていくのかもしれない。

しかしながら、今後どんな時代になるにせよ、図書館という「場」の持つ意味はきっと変わらないだろうし、また図書館そのものがなくなるということも、きっとないだろうと思う。そこは、人と人とをつなぐ場。多くの人々が交わり、議論し、そして笑顔になる場。私の学生生活は、図書館の存在で大きく変わった。これから先の未来においても、

多くの若者の人生を変えるような、そんな存在であって欲しいと思う。

(たぐち さとし。免許資格課程センター長)